

—〈書 評〉—

開明的市民の原像——中江丑吉の同時代性について

加藤惟孝著／阪谷芳直編

『北京の中江丑吉——ある個性の記録』（勁草書房）

（東京大学教授）三谷太一郎

中江丑吉の人と業績が様々の形で戦後の日本に紹介されて既に四十年に垂んとするが、その間に中江のイメージは、とくに戦争を体験した世代の間に戦後日本市民の一つの理想像として定着した感がある。中江の存在はその死後も、むしろ生前にもまして生き生きとした同時代性をもったものとして、戦後日本をつくった多くの人々の意識の中に生き続けてきたといえよう。そのような中江のイメージの形成に重要な役割を果たしたのが、本書に収録された故加藤惟孝の一連の文章である。

加藤の中江論の最大の特色は、開明的市民としての中江像（加藤自身の表現によれば、「自覚したマッセ」^{アンソツヒ}としての中江像）を鮮明に打出したことであろう。したがってもし加藤が懸案の中江の評伝をかいていたとしたら、中江の人生は「本来的」市民から「自主的」市民^{フエアソツヒ}（すなわち開明的市民）へのビルドゥングスロマンとして描かれたのではあるまいか。そしてそれは中江自身の生活意識にもっとも適合したものであったと思われる。

加藤の中江論を通してうかがわれる中江の開明性^{フエアソツヒ}は、悟性の開発に止まらず、あらゆる現実を貫く^{フエアソツヒ}理性の認識にも及ぶラディカルな開明性であった。中江はその最高の表現をドイッチェ・イデアリスムスに見出した。要するに中江の開明性は人間の意識作用の極限を志向するものであったのである。

しかもそのようなラディカルな開明性を担保するものは抽象的思弁ではなかった。中江はヘーゲルに従って、「現実」を通して「真実」に接近しようとした。ヘーゲルの目指した「歴史における理性」の認識を、実証的歴史研究を通して行おう

としたのである。つまりヘーゲルの課題をヘーゲル的方法の徹底によって行おうとしたのである。そこに中江とマルクスとの接点がつくられた。中江はヘーゲル歴史哲学の基礎となった「現実」認識、とくにその粗笨な中国認識を厳密な実証的手続によって再確立しようとした。それが中江の『中国古代政治思想』研究であった。それは中国における政治社会の発生とそれを正当化する政治的イデオロギーの研究であり、具体的には天子と村落共同体とを基本的構成要素とし、それらを媒介する中間的政治勢力を欠いた「アジア的社会」とそれに適合する経学イデオロギーの研究であった。中江の研究の特色は、ギリシア古典古代政治思想史と対比しながら、中国古代政治思想史の独自性を明らかにしようとしたような比較政治思想史的方法にあり、それによって古代中国において既にその原型が形成された中国政治思想そのものの特質に光をあてようとしたのである。

中江においては、開明性の発展はそれ自体が目的であり、何らかの目的への手段ではない。学問や知識は単なる道具ではなく、特定の人格と不可分である。人格が目的である以上、学問や知識もまた目的であらねばならない。学問や知識を求めることは、人格の拡充、ヒューマニティの発展を求めることにほかならない。「求学者」は「求道者」である。「知至而后意誠」という『大学』の命題はそのまま真理として肯定される。経学を研究の対象とした中江は、同時に研究を通して経学を深く内面化していたともいえよう。

他方中江の市民性は、日常生活それ自体の自己目的性の強調としてあらわれる。「『無目的』乍ら晏如として残された秒瞬の時間を健康に生きて居る老人」は、そのことの故に祝福される。すなわち中江は市民の日常生活をより高次の目的への手段としてみず、それ自体かけがえのない人類史の展開としてみる。そのような考え方にあらわれた市民性は、当然無名性への志向を伴う。中江は

ある書簡の中でそれを次のように表明する。「功名には値しないし、またそんな事に訴へる必要も毛頭ない。然も人類が自己自身保持と繁栄とのために各個人に普遍的に課しつつあるアルバイト、……私は近來こうした仕事を完全に果す人達に頭を下げたく感じ出しました。」中江によれば、このような日常無名のアルバイトこそが「歴史における理性」の自己実現を媒介する。すなわちラディカルな市民性は、^{フェアユース・フティツヒ}「理性」的であることにあって、ラディカルな開明性と結びつく。それが中江の志向した開明的市民のあり方である。そしてこれが戦後日本市民の範型として、戦争を生きのびた少なからぬ人々の間に受け入れられたのである。その意味において、中江は戦後日本文化の形成に独自の貢献を行ったとみることができよう。

加藤をはじめ中江に親しく接した人々によって描かれた中江像は、『断腸亭日乗』などにあらわれた人間永井荷風との精神的類縁性を強く感じさせる。現に中江は『おかめ笹』や『濯東綺譚』を愛読し、荷風の文学を高く評価した。それだけでなく、両者の間には年齢のちがいや、生前の有名無名のちがいはあったが、それぞれの経歴・境遇・態度・主義主張の上でいくつかの共通点が見出される。両者ともに東京小石川の明治有数の知識人を父とする家庭に育ち、ともに有形無形の父の圧力をうけながら、ともに一高受験に失敗する。二十代を長期間外国で生活し、「放蕩無頼」の時期をすごしたことも同じである。さらにともに芸妓出身の女性を入籍し、親兄弟（中江の場合には姉）との不和を生じたこと、またともに離婚し、以後ともに独身を通したことも両者共通する。

また両者ともにそれぞれの父親が生前元老西園寺公望と親近関係にあり、その関係から両者ともに西園寺と相知り（とくに中江の場合には、西園寺を通して住友や満鉄から研究上の補助をうけ）、ともに体制のアウトサイダーの立場にいながら、西園寺を通して、日本の政治階級の開明的部分と

つながっていた。（なお加藤作成の「年譜」は、おそらく『中江丑吉書簡集』所収の昭和七年六月十六日付木村英一宛書簡によって、中江がこの年「十八年ぶりに東上して」はじめて西園寺に会ったとしているが、小泉策太郎の『随筆西園寺公』に収められた「坐漁荘日記」昭和六年十一月九日の条には、この日西園寺が小泉に対して「先日、初めて中江の息子に逢ったよ、丑吉といってね、よく兆民に似てゐる」とのべた旨の記事がある。）両者ともに昭和十五年十一月の西園寺の死に際して、新聞や雑誌から感想を求められ、ともに拒否しているが、中江は鈴江言一宛書簡において、荷風はその日記において、ともに西園寺への敬慕の念を記している。

両者のアウトサイダー的性格は、若き日をすごした外国との親近感（というよりも一体感）および日本に対する異邦感にあらわれているが、それは満洲事変以後の同時代の日本に対する批判という明確な形をとって一層強まる。昭和十一年の二・二六事件は荷風に大きな衝撃を与えるが、その年にかかれた『濯東綺譚』は、「濯東」の遊里の一隅に残る人間的素朴さを、満洲事変以後の政治の変化に伴う東京の世相の変化との対比において描いたものであり、それ自体が深刻な時代批判であった。中江が荷風を「老国士」と評した所以もここにあったと考えられる。この作品は荷風におけるラディカルな市民性の表現であり、中江はおそらくこれに共感したのであろう。昭和十四、五年から両者がともに旧約聖書を座右の書として読み始めたというのも、両者の同時代に対する態度の共通性に由来する。両者はともにラディカルな開明性とラディカルな市民性が結びついていたという意味において、すなわちともにアウトサイダーの立場をとりながら、開明的市民を志向したという意味において、精神的類縁性をもっていたといえるのではあるまいか。

（1984年8月刊、四六判、230頁、2100円）